



東北地方整備局
仙台河川国道事務所
仙台西国道維持出張所

仙台都市圏 自動車交通ネットワークの重要道路。 開通30年目の大規模改修を実施中。

仙台市中心部から東北道仙台宮城ICを結ぶ仙台西道路では、施設の老朽化対策のため、開通以来初めてとなる大規模改修工事を実施しています。東日本大震災で大きな被害を受けた東北地方で道路の安全・安心に奮闘する現場職員を紹介します。





仙台西道路位置図

宮城県仙台市は、広瀬川や青葉山などの豊かな自然に囲まれた、宮城県中部に位置する経済・文化の集積地でもある東北地方最大の都市です。

仙台市周辺では、こうした経済活動を支えるため、東北縦貫自動車道・仙台北部道路・仙台南部道路・仙台東部道路・三陸沿岸道路により都市圏環状道路「ぐるっ都・仙台」が形成されています。そのなかでも、仙台市中心部と東北縦貫自動車道「仙台宮城IC」を結ぶ全長約5.1kmの自動車専用道路「仙台西道路」は、仙台市の自動車交通ネットワークを担う重要な路線の一つとなっています。

その仙台西道路では、現在、開通後初めての大規模改修を行っています。

文教地区を貫く道路は 通勤・通学時の重要道路に

仙台西道路は昭和46年にルートを承認し、58年に暫定2車線での開通、62年に全線4車線が開通しました。道路の近くには東北大学があり、また住宅地も広がる地域。そのため、計画当初は生活環境の悪化を懸念して反対運動も起こりましたが、仙台市郊外への宅地造成に伴う交通量の増加から、次第にその重要性が認知されました。

「仙台西道路の1日の交通量は、平成22年の調査では5万8000台。特に朝夕の通勤・通学時間帯は大変な混雑で、4車線でも限界です。こうしたことから事故防止や安全対策と

して、1日に6回パトロールを行っています」(仙台西国道維持出張所長 中村)。

ほかにも日頃から細かい点検を実施するなど、維持・管理に努めています。毎年8月には仙台七夕祭りの花火大会に伴う通行止めを利用して、警察、消防、工事関係者などによる管理者の枠を超えた一斉点検を行っています。点検は交通規制をかけたあとの2時間半という短時間で、消火設備(スプリンクラー放水)や路面、照明、交通掲示板など多数の設備を対象に実施します。

しかし、供用開始から30年という年月が経ち、漏水、機械類・内装板の腐食などの老朽化が進み、これまで部分的に実施してきた補修工事では抜本的な対応をとることが難しくなってきたことから、平成23年より青葉山トンネルの補修工事に着手しました。

仙台西道路の約4割を占める 青葉山トンネル補修工事

取材で訪れた平成26年2月は、上り線に設置していたトンネル内装板を撤去し、トンネル内装板を新しく設置していました。

「内装板を新しくきれいにするのは美観だけでなく、実は事故の防止にもなるのです」(中村)。



上り側から見た青葉山トンネル入口

照明があるとはいえ薄暗いトンネル内。スピードの感覚が鈍り壁に接触するという事故も多くあります。そのため、内装板を明るくきれいにすることで、カーブが見やすくなり、視認性の向上が事故の軽減につながります。今回採用した内装板は、交換しやすい、割れても飛びちりにくい、汚れが落ちやすいという3つの利点があるものを使っています。

内装板をはがした壁面を見ると、老朽化の影響が一目瞭然です。特にコンクリートの継ぎ目からの漏水が多く、冬期になると漏れた水の多くが氷柱(こおろぎ)になって

仙台七夕祭りの花火大会に合わせて行う一斉点検の様子



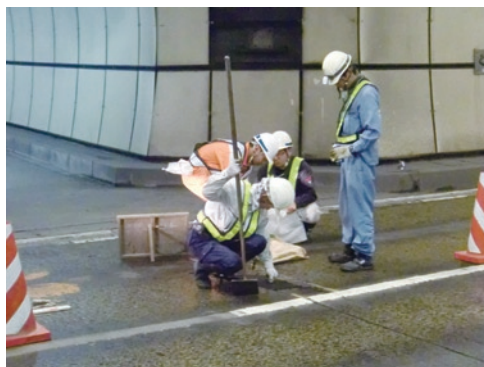
スプリンクラー検査。実際に水を噴射して点検。(平成25年8月撮影)



消防、警察、関連業者一堂に会して行う一斉点検。点検前に各セクションの作業確認を行う。(平成25年8月撮影)



最近では携帯電話の普及によりあまり使われなくなったが、非常電話も緊急事態に備えて念入りに点検。(平成25年8月撮影)



路面の補修点検。(平成25年8月撮影)

慮と補修方法だといえます。

利用者のために段階的・多面的な広報活動を展開

補修工事は青葉山トンネルに続いて、川内トンネル、仲ノ瀬橋などまだ工事は

続いていきます。こうした長期に渡る工事では交通規制も増えることから、道路利用者に工事を周知するための広報活動にも力を入れています。

特に平成25年9月からは、工事が集中したことから、規制情報の発信方法や内容など、関係機関と連携して「事前・直前・期間中」の3段階で展開しました。

「どのように広報するか、かなり検討しました。事務所からの記者発表だけでは新聞の小さな記事にしかならず目立たない。そこで点検・清掃・工事関係業者などで行った協議会の皆さんが新聞に広告を出しました」(中村)。

そのほか、日本道路交通情報センターから頻繁にラジオ放送をしてもらうように依頼。「平成23年7月まで宮城県警に2年ほど出向していました。そのため道路交通情報センターにも見知った人が多くいて、その時の経験と人脈が役に立ちました」(中村)。

また、ある現場の工事業者は、工事現場近くに小学校があることから、通学路にある歩道橋にあえて現場が見えるよう透明の防護板(手すりも)を設置。その上で、子ども用の工事説明書を作成し小学校に持参したところ、後日、低学年用の説明書も欲しいとリクエストがありました。「子どもたちは、工事に興味があつて

広報効果が高いです」(中村)。こうした多面的な広報活動により、道路利用者のトラブルもなく、現場の作業もスムーズに行われます。

機械設備の老朽化にも段階的に対応

平成26年以降はトンネルほか既存施設の工事以外にも、機械設備の老朽化にも対応していく予定です。

「建設当時はメンテナンス作業のしやすさをあまり考えていなかったようで、機械を取り替えるためのスペースもないくらいです。しかし今は機械の小型化も進んでいるので、順次入れ替えていく予定



トンネル壁面はコンクリートの継ぎ目からの漏水が激しい。(平成26年2月撮影)



古い内装板の撤去作業の様子。外したパネルはホコリが立たないように水を拭きかける。(平成25年11月撮影)



新しい内装板パネル。古いものと比べると1片が小さいので、損傷した場合でも取り替えが容易に。(平成26年2月撮影)



新しい内装板の設置作業。(平成26年2月撮影)

内装板の取り替え作業の様子

です。そして、トンネル設備機器類の配置なども検討し、将来メンテナンスがしやすいようにしていきたいと考えています(中村)。



写真左側は内装板を撤去した跡。右側にはまだ古い内装板が残る。(平成25年11月撮影)

平成25年10月、県警時代の経験を生かし、中村は仙台西国道維持出張所としては初めて、出張所と宮城県警交通管制センター、日本道路交通情報センター担当者との顔合わせの機会を設けました。声だけ、名前だけでは分からない関係より、お互いの顔を知ることでもっと関係を密にしていけば、広報活動だけでなく、事故が起こった際の連絡といった「コミュニケーション」もスムーズにいくと考えた上でのこと。

「道路があることの便利さ」を
やりがいに維持・補修に努める

「道路を利用されている方に、工事のことを理解していただくことは大事な作業。そのためにはお互いの関係を密にし、連携することで物事が進めやすくなると思います」(中村)。

そして何よりも心がけているのは安全。震災時、県警に出向中だった中村は、言葉にならないほどの状況を目の当たりにしてきました。今でも思い出すと胸が詰まると言います。そのときに感じたのは、環状ネットワークがあつたからこそ、救援物資や復旧作業車が市内外を通行することができたという、道路の利便性でした。

『道路を使う便利さや、いざというときの安全・安心のために補修し、維持していくこと』をやりがいに、新年度着工する工事に向けて準備を進めています。



下りのトンネル入口付近の様子。下り線はスピードを出す車が多いため、表示を派手にして車止めも二重に設置。(平成25年11月撮影)



仙台西国道維持出張所
出張所長

中村幹男

昭和60年入省。
最初の赴任地は磐城国道事務所。以降、道路一筋。平成21年4月宮城県警へ出向。平成23年7月東北地方整備局道路部交通対策課課長補佐を経て平成25年3月より現職。



仙台西国道維持出張所の職員